

## ひとりひとりがいきいきと生きるために

—生活を見合う場「活かしあえる道創り」—

デリバリーハウスゆうじや

実方 裕二

(発信 生活感を取り返す 活かしあう)

### 1. はじめに

重度ショウガイシャである私は、親から自立して生活をして多くの方とかかわりを持ってきた中で、世の中にとっての自分の存在や、自分の差別性を認識した。私は、先輩や同級生、その他のショウガイシャと生活を見合う中で、自分のコンプレックスや頼り癖がなぜ生まれるのかをお互いに確かめ合うことや、自分がチャレンジしたいことを見つけて挑戦することで、私自身が生活の主人公になれると気が付いた。そこで、ショウガイのあるなし、大人子どもに係わらず、お互いの生活や思いを確かめ合い、自分の存在意義を確認し「活かしあえる道創り」の必要性を世の中の様々な人に伝えるための「発信基地」を作りたいと思った。それまでの経緯について述べる。

### 2. 私から見た現在の世の中

ショウガイシャは、自分から物事を伝えたり発信したりすることを奪われてきた。人に面倒をかけるだけの厄介者と見られているからだ。しかし、誰も人とかかわりなしで生きていけない。けんじょうしゃは「一人で生きている」と思い込んでいるうえに、それで社会を維持しているという幻想を真実だと思い込んでいる。ところが、ショウガイシャもその誤認に気が付かず翻弄されている。その結果、重度ショウガイシャは、様々な理由で人間関係を限られた、生活権もない隔離施設等へ追い込まれてしまっている。これは、50年前と何も変わっていない。

「自立」＝「一人で生きていくこと」という幻想は、けんじょうしゃにも「生きにくさ」を蔓延させている。重度ショウガイシャはそれ以上に、生まれてくる前に殺されてしまうし、ショウガイがあると分かった時点で異常とみなされる。「一人で生きていくこと」＝「いいこと」という認識も、今の養護学校でさえ何も変わっていない。もうこれは、マインドコントロールだ。それが我々をコンプレックスの海に突き落とし、自暴自棄にさせるのだ。



私たちが「人間扱いされていない」という現状を打破するためには、隔離された仲間たちが街中に出て、ありのままの姿を見せていかなければ解決しないだろう。ところが、言語ショウガイの私が語れば語るほど「干されている」感覚がある。それはなぜか。周りから浮いてしまうからだ。

### 3. 先輩から学んだこと

私が現在のように自分自身の言葉で、分かるまで相手に伝えるようになったのは、1学年上の先輩の影響だ。お互いに年を重ねて、酒を酌み交わすことも多くなったときのことだ。居酒屋で店員に注文する際、普段の私は、友人に注文を任せっきりにしていた。ところが先輩は、言語ショウガイがあろうが

関係なく店員に注文をする。「私が注文するのだから私に聞いてください」と。店員も困惑しながらオーダーを確認する。それを見ていた私は「すごい。周りから浮いていてもかまわないんだ」と驚いた。「注文できないと決めつけてくるやつがおかしい」とはじめて気づいたのだ。だからと言って、先輩は何でも自分でやっていたわけではない。先輩の生活を見る中で介助者に依頼をしながら自分らしく生活していることも発見した。「人と違っていい。できないことは手伝ってもらえばよい。人に頼みながら、自分の味を出していく、多くの人と付き合い影響を受け合い、互いの思いを寄せ合って生き生きと暮らしていく。」世の中の実現。それが、私が行きついた考えだ。

#### 4. 私取り組みたいこと

私たち重度ショウガイシャが生きていくためには、人とのかかわりが絶対に欠かせない。だからこそ、私だけでなく、私をとおして関わる全ての人と、お互いの持ち味を生かし合えるはずだ。私たち重度ショウガイシャは、自分を「活かしあえる道創り」の大きな役割を担っていることに気付くべきだ。そのためには、重度ショウガイシャがやりたいことを探すことができ、挑戦できる環境が必要だ。しかし現状では、親の一方的な思いだけで物事を進める状況や施設の預かる的感覚での安易なプログラムに終始していて、それは不可能だ。だからこそ重度ショウガイシャにとって「できないことは手伝ってもらいながら、気楽にやりたいことを見つけ、楽しく責任をもって生きられる」そういう価値観を味わえる場を作りたいのだ。私達重度ショウガイシャが町中を闊歩すれば「人と違っていい。一人でできないことは劣っている事ではない。一人で生きなくても、お互いに活かしあえる道を創ればいい」と誰もが自然に気づくはずだ。

お互いを「活かしあえる道創り」のためには、けんじょうしゃも「一人で生きること」＝「自立」＝「よいこと」の幻想から目覚めなければならない。特に、一番近くにいるヘルパー、養護学校の教員、施設職員が仕事を離れて、自分自身を振り返り、お互いに確かめ合うことが必要だ。また、お互いに「活かしあえる道創り」の感覚を子どもたちに味わってもらう事が絶対に必要だ。いま、普通学校や養護学校で「互いを活かしあえる道」を伝える授業ができるように関係各所に働きかけている。

私が差別を受けてきたことも含め、自分たちの醜さと向き合い、少しでもまともに生きていける世の中になるように頑張ろう。



<助言者コメント> 根本 治代（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授）

本発表には、「社会のなかでお互いを知り、理解する場がないことで、互いを活かしあえる道を逃してしまっている。このことは今後の社会を担う子どもたちに大きな損失をもたらす」といった、大変重要なメッセージが含まれています。

それぞれ人には生きづらさがあり、それが自由に身体を動かすことが難しい場合や、相手に自分の要望を伝えるのに時間がかかるなど様々です。周りは表面上の理解だけではなく、生活上どのような制限が生じているのか、ともに過ごす時間や場所があることで、その人に興味や関心をもつことができ、そのようなお互いの関わりをとおして、支援関係を越えた、発表者が提案する「互いを活かしあえる道」を創造することができるのでしょ